

三島通良『ははのつとめ』(明治22年)に関する一考察

— 家庭育児観の検討 —

近藤 幹生

はじめに

本稿は、三島通良^{みしまちよし}(1866-1925)(以下三島と略)の育児書『ははのつとめ』(明治22年)^(注1)における家庭育児観を検討するものである。筆者は、同著作における「小児教養法」の内容を三島の「家庭育児観」と規定して論じていく。

筆者は、「三島通良『学制調査資料・就学年齢問題』(明治35年)に関する一考察」(以下『学制調査資料・就学年齢問題』を『就学年齢問題』と略)^(注2)において、三島の6歳就学論を検討した。三島は、明治20年代半ばから約10年間、文部省学校衛生行政において活躍した。当時、就学年齢を満7歳に変更すべきであるという議論がおり、それに反論することを目的として『就学年齢問題』をまとめたのである。筆者が、百年以上前の三島の業績に注目してきたのは、就学年齢のあり方を、当時の学問的知見に照らして検討していたからである。二つ目には、家庭から学校への段差という問題、つまり小学校第一学年の負担に配慮する姿勢をもっていたからである。こうした三島の認識は、時代は異なるが、現今の就学年齢の議論に示唆するものがあるという角度から、論じたのであった。

『就学年齢問題』の内容は、ドイツ医学者らによる小児科学や学齢成熟などの知見、日本の学校衛生学、当時の小学校・幼稚園における三島自身の身体発育調査データなどから構成されている。これらを根拠に、三島は当時の6歳就学を変更する必要性はないという立場を貫いたのである。しかし三島は、6歳という年齢のみに固執したわけではなかった。『就学年齢問題』の結びでは、子どもにとって就学を考えると、家庭から小学校への段差が大きいことに十分配慮すべきである、と論じている。

では、なぜ三島が家庭から学校への段差に注目することが可能だったのか。筆者は、この点に関心をもち、明らかにしていくアプローチの一つとして、『ははのつとめ』にみられる家庭育児観を検討することにしたのである。後述するが、『ははのつとめ』の内容自体をくわしく分析しているものは、現状では見当たらない。

本稿では、当時の背景を踏まえながら、三島の家庭育児観を考察していく。ここで、三

島の育児観形成の経緯を簡単にふれておく。『ははのつとめ』にみられる家庭育児観は、三島が文部省学校衛生行政に関与する以前（明治10年代末から明治20年前後）の思想状況を表現したといえることができる。いっぽう『就学年齢問題』は、明治24年、文部省に関与し、学校衛生主事及び小児医学の専門家としての立場を踏まえ、明治35年になってまとめあげたものである。本稿では、こうした三島自身の育児思想の形成過程を考えながら、家庭育児観に焦点をあて論じていく。

当時（明治20年代半ばから30年代初め）の背景としては、日清・日露戦争に直面していく富国強兵の時代であり、三島の思想形成にも影響を及ぼしていく。富国強兵を支えるために体育を重視する、と三島自身が明言していることからみても、時代的制約を受けていたのは当然だろう。しかし、『ははのつとめ』の執筆は、それ以前の時期であったことや、当時の幼児・児童の置かれた実情について、身体発育の立場からみつめていく姿勢があったことも否定できない。こうした背景を踏まえながら、遊戯を中心とした家庭育児観について検討していく。

三島の家庭育児観を検討するにあたり、筆者は以下の仮説をもった。

第一は、明治20年当初における三島の家庭育児観（小児教養法の内容）には、その後、確立をみる学校衛生学の萌芽が、すでに存在していた可能性があるのではないかということである。三島は、明治24年、文部省嘱託として学校衛生行政に関与して以来、日本における学校衛生学の確立に積極的に貢献していった。しかしそうした力量は、いきなり形成・発揮されたのではないと思う。この点について、学校衛生学と家庭育児観との関係を検討していく。『ははのつとめ』は、文部省へ入る以前（明治22年）の学生時代に執筆しているのである。

第二は、三島の就学年齢論は、家庭育児観を土台に組み立てられたのではないかという点である。前述した筆者の研究においては、『就学年齢問題』における三島の理論構成のうち、家庭から学校への就学の段差について、三島がどう認識していたのか、十分には把握できていなかった。しかし、『ははのつとめ』にさかのぼり主張を検討していくことにより、家庭育児と学校との関わりが浮き彫りになってくる。三島は、家庭育児の根幹において遊戯を位置づけ、「注意して放任する子育て」法を基本的考え方としている。そして、家庭からみた就学の段差に対する認識を確認することができるのである。三島の就学年齢論の基礎は、家庭育児観にあることを仮説としたい。

本稿では、これらの仮説をもとに『ははのつとめ』を分析していくが、乳幼児・児童の成長・発育に関する三島の思想に焦点をあてる。そして、三島の家庭育児観には、ドイツ医学の影響とともに、明治期以前からの庶民の育児に対する関心が反映されていたことも視野に入れて論じていきたい。

1. 先行研究及び参考文献^(注3)

研究対象資料とした『ははのつとめ』は、歴史人物辞典などで「三島通良」の項目に必ず登場する文献である。しかし、内容をくわしく分析したものは、今のところ見出すことができていない。明治初期の小児科学の状態を詳しくふれた珠玖捨男『日本小児科医史』などがあるが、ここでも小児科医としての活躍や文献として『ははのつとめ』を紹介しているが、内容には言及していない。三島通良及び学校衛生学については、杉浦守邦「三島通良(1)－(18)」, ZhenSongAn「養生思想と教育的学校保健の成立」、三島『学校衛生学』、近藤真庸「学校衛生顧問会議の研究(1)～(4)」などがくわしい。また、第三次小学校令における学校衛生の反映については、『国家医学会雑誌』における三島の口演記録がある。明治20年代半ばから30年代前半の就学年齢の議論に関するものとしては、佐藤秀夫「学校制度と年齢一年齢主義の歴史的背景」、水本徳明「明治期長野県における就学年齢の統制に関する研究」、三原芳一「明治の就学年齢」などがあり、当時の就学年齢の議論と学校教育現場の実態、学校衛生学と就学との関連などについて、分析がされている。しかしながら、明治20年当初の学校衛生学以前の認識である家庭育児観については、前掲杉浦が『ははのつとめ』の簡潔な解説をしているが、くわしく研究されてはいない。

『ははのつとめ』の内容自体に関する先行研究がみられないが、この育児書が読者に与えた影響について調査することは、ある程度可能である。資料の特定に困難性があるが、当時の子守学校について、範囲を限定して検討していく。長野県の農村地域には、明治20年代、子守女子が幼な子を連れて登校する子守学校が盛んであった。神津善三郎の先駆的研究『近代日本における義務就学に関する研究』や、信濃教育会『雑誌信濃教育』の記述内容からみていく。

『ははのつとめ』の時代背景を考察するにあたり、同時期の小児科学の状況や育児論についても踏まえる必要がある。本稿は、この時期の小児科学や育児論に対するあらたな検討をおこなうものではないが、三島の家庭育児観の位置づけを分析するにあたって、以下の知見を参考にした。明治初期、日本の医学に貢献し、三島にも影響を与えたドイツの医学者・エルウィン・ベルツ(ERWIN-BALZ 1849-1913)については、前掲『日本小児科医史』やトク・ベルツ『ベルツの日記』などで足跡を知ることができる。また、明治20・30年代の富国強兵体制のもとで、衛生・保健思想の位置づけについて、立川昭二『病気の社会史』などは、明治初期の医学の現状や、健康＝兵力という思想が、日本の衛生行政・保健思想を支配していたことを主張している。

江戸末期から明治初期の育児論についても、多くの先行諸研究があり、以下の研究を参考にした。諏訪義英「明治時代の幼児教育思想」、山住正巳・中江和恵『子育ての書1・2・3』、山住「近世における子ども観と子育て」、神島二郎「天皇制国家における子ども観」、太田素子「近代的孩子観の胎動」、木下比呂美「近代国家と一身独立」、木下「近代の子

ども像と国家主義的子ども像」などである。また、三島自身は、幼稚園教育に関与したことはないと考えられるが、明治初期から20年頃までの幼稚園教育や幼児教育思想についてみておく必要があり、日本保育学会『日本幼児保育史第1巻・第2巻』、文部省『幼稚園教育百年史』、岡田正章『日本の保育制度』、湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』などの関連する研究を参考にした。

2. 『ははのつとめ』にみる家庭育児観

(1) 全体の構成と執筆目的

『ははのつとめ』は、明治22年に出版され、「親の巻」と「子の巻」の二分冊^(注4)になっている。「親の巻」目次は、懐妊の事、懐妊中養生の事、出産の事、産褥の事となっている。「子の巻」は、10章で構成され、小児教育法 of 精神、人乳、乳母、母親の乳又は乳母なくして小児を養育する法（人工養育法）、分娩より初めて歯の生る迄の小児教養法、生歯及小児の発育、生歯後の小児教養法、種痘、小児の疾病及び摂生法、小児身体 of 発育知識の発達より就学児となるまでの母親の職務、となっている。「親の巻」は浜田玄達、「子の巻」は弘田長と、いずれも帝国大学における三島の恩師が序文を寄せている。

三島によれば、この書物は当初注目する人が少ないと考えていたが、発売後、初版千部が売れて二版になったという。二版は榎本武揚文部大臣に進呈し、題字を書いてもらっている。そして三島は「皇后陛下の御覧を賜ふるに至れり」という状況となったことを「光栄」であるとしている^(注5)。こうした事情からいえるのは、『ははのつとめ』は、一般の婦人向けといっても、当時の知識層など経済的にも富裕な階層へ普及されたということができる。

出版の目的は、婦人と子どもの衛生の必要性をわかりやすく説くことである。この重要問題を論ずるものが少なく、日本の母子の衛生法は不完全であり、改めるべき現状にあることを力説した。これまでに、江戸期の医学者・香月啓益『小児養育草』^(注6)などには注目できるが、医学者以外の育児論が主流であり、一般向けに、しかも医学者の立場から小児の衛生について啓蒙するという目的で、『ははのつとめ』は出版する必要があったという。内容は、翻訳ではなく三島自身のオリジナルであると考えられ、末尾には使用した参考書が紹介されている。日本のものでは、江戸期の前掲・香月啓益『小児養育草』と、三島の恩師である弘田や濱田らの著書がある。他はドイツの医学書が多く、帝国大学教師エルウィン・ベルツや学校衛生学者バビンスキーなどの名前も見られる^(注7)。

(2) 「小児教養法」にみる家庭育児観—乳児から就学まで

① 「注意して放任する」子育て法

三島は、育児のあり方として、「注意して放任する」子育て法を説いている。上等社会

と中等社会以下における子育てのあり方を比較し、次のように力説する。「我国の上等社会の御児達のか弱いのは、皆人手がありすぎ、乳母や保母がよりたかりてチャホヤと、そうして云うまま気ままに育てたる結果であります」「中等社会以下では手をかけたくも夫々の職務におわれ乳母の保母の人を置くこともならず、自然天然に任せるゆえ、強壯に育つのです」と主張する。ここから導かれる精神を、「注意して放任せよ（気をつけてはふっておけ）」としている（注8）。この精神を基本として、具体的な子育てのあり方を、乳児期から就学前までの「小児教養法」として展開しているわけである。項目としては、人乳、乳母、人工養育法、分娩より初めて歯の生えるまでの小児の養育法、生歯及び小児の発育、種痘、小児の疾病、及び摂生法などとなっている。

② 哺乳即教育の端緒

乳児期の保育についても、授乳方法などを詳細に述べているのは、小児医学者の立場として当然であろう。注目したいのは、「啼く」ということについて、母親は要求をていねいにつかまなければならないと主張する点である。

「小児の啼くと云うのは、即ち小児の語^{ことば}です。小児は口が利ぬ故啼て自分の意を母親に知らせるのですから啼いたときは真に空腹のか、或は倦怠^{きか}なのか、或はしめしでも濡れて気分が悪いのか、腹痛でもするのかなど、能々考へて其望みをかなえてやらねばなりませぬ」（注9）

このように、各時期の要点を主張していくが、貫かれている考え方は、「注意して放任せよ」ということで、肝心なのは、遊戯を中心とする家庭での日常生活であるという。

③ 遊戯を中心とする家庭育児観

小児の発育にとって不可欠なのは、あくまでも遊戯を中心とした家庭での日常生活が基本であるという。遊戯については、具体的に「外方の遊戯」として戸外での活動をすすめていくことにより、男女ともに活発な子どもに成長していくとする。外での遊戯としては、男児の紙凧と女兒の羽子が、絵入りで紹介されている。室内の遊戯についてはあまりふれていないが、「ゴム人形」や「善き絵本」ならよいという。以下、遊戯に関する部分を引用する。

「最必用なのは遊戯です」「此で娯楽で居うち知恵がつき、記憶を増すのですから、母親ハ先此遊バせると云うことを始として、小児を教育ねハなりませぬ、夫故戯も偽言を吐たり欺したり戯言を云うたりしてハなりませぬ」「頭から厳しくしてもいけず、さりとて我儘もなりませぬ」「玩弄物ハ小児の年齢に依って違いますが、毒な色料を使った物や怪我を為易き物ハいけませぬ」「小児は風の子と称へ。家に許り居る者でハない。外へ出て風に當るものだと申しますのハ善諺です」「五体が平均に能運動するハ勿論呼吸をも劇しますから肺の作用を強め。血流の循環を盛し、雨風に当為に皮膚ハ強壯になりて、感冒なくなり、身体は運動す為に益肥太て、其上食事も進まずし便通も正くなり（以下略）」（注10）

④ 家庭や学校における環境

三島は、遊戯を中心とする家庭育児とともに、家庭生活における環境についても、くわしく述べている。日当たり、温度、火傷への注意、換気への配慮などである。また、幼児や児童に対して、身近な事物への関心と呼び起こすよう掛図をかけることなど、以下のよう

に述べている。「南向きで日当宜空氣の流通よき室を選んで」「暖炉へは金網の囲をして火傷をせぬようにし、又寒暖計をかけてセ氏十六度ほどにして置く。冬などにて戸や障子の閉切であるときは不断注意して空氣を交換する」「眼を悦はしたり、物の形と名を覚えさせる為に、壁には鳥獸器物景色人物などの綺麗な掛図等を懸る」(注11)

このように、家庭生活における環境に留意すべきだとしたが、学校や幼稚園に通わせる場合には、その設備や環境には配慮する必要があるという。特に母親が、小児の腰掛と机が適切であるか否かに注意すべきだと、以下のように主張する。

「先其所(学校や幼稚園のこと・筆者)の腰掛や机は、其年齢の小児の体格に適合せて、造作つてあるか否かは、母親が注意可きところで、机や腰掛の悪かりし為、身体に曲がった所が出来たり、或ハ余り幼少から幼稚園に入れ、まだ腦の支度や眼の作用が充分でなきのに、縫取などをさせて、其為非常に高度の近視眼になりなどするものが沢山ある」「狭き所に大勢の小児を遊ばせ、悪き塵埃の混合った空氣を呼吸た為肺病を發させたりなどすることも度々ありますから」「世の母親及び教育家は注意あらまほし」(注12)

三島は、後に文部省行政に関与してから、学校衛生主事として学校医を設置するためにも力を尽くした。しかし、それ以前から身体發育を踏まえて、小児医学者の立場から、幼児・児童にとっての学校環境・衛生に注目した見解を表明していたことが、ここからも明らかになる。

⑤ 就学へのとらえかた

就学及び家庭と幼稚園との関係については、二つの考え方を明確にしている。第一は、母親が仕事で家庭にいないとか、家に子どもをおくことが望ましくない場合には、幼稚園に通わせてよいが、基本は家庭教育を中心にするべきだという。

「親子の愛情が先にたちます。此はかりハ決して人工に出来るものではありません。この愛情という尊貴ものがあればこそ、家庭教育は周到ので御座ります」「母親に職務があつて家に不在とか、或ハ家にハ教育を受けぬ者が多くて、家に置けば悪いことばかり見たり聞いたりするとか云う小児ハ幼稚園に頼みて教育て貰うも差支ハない」(注13)

第二は、早く学校へ行かせればよいのではなく、身体發育の面から医師の診断をあおぐべきだという見解である。「小児ハ五六年になる迄ハ決して規則立た学校などの課業を授けてハなりません。なぜなら、小児の身体も腦の發育も未其に耐ふることが出来ませぬ」「先始にハ物を熟視させ、次に思考させ、次には其に目を著させ進で之に注意させると云ふ順序を遂ふて参らねばならない」「満六年以上になったら、小児ハ直に学校にやつて、

稽古に取懸て宜しかと云ふと決てさうではない。母親は先ずその小児を良医の所へ連れて行て、最早稽古事をさせても宜かをみせる」「小児に早く充分な知識の発達を望まるなら望まるほど、先其身体を壮健にして懸るのが一番緊要」(注14)

以上のように、『ははのつとめ』に記述された家庭育児観には、乳児から就学までの保育法として、「注意して放任せよ」という子育て法、家庭における遊戯の重要性、家庭や学校での幼児・児童の環境、就学課題などをくわしく問題にしている。家庭育児の側からみると、就学させるという課題に対しては、むしろ消極的姿勢さえ窺える。それだけ、家庭における幼児の立場からみて、学校現場は児童に好ましくない環境と考えていた。次に述べるように、当時三島は、学校が「心身ヲ衰弱萎摩セシメ将悉ク畸形ト病体トニ陥落セシメントス」という指摘までしていたのである(注15)。

3. 学校衛生学と家庭育児観―就学年齢論における位置づけ

(1) 学校衛生学を構成する内容

次に、学校衛生の基本的内容及び学校衛生学と家庭育児観との関わりについて述べる。

2で示した三島の考え方は、明治24年、文部省普通学務局から学校衛生事項の取調を委嘱されてから、さらに充実・発展していった。三島は、明治26年、ドイツの学校衛生学を基盤としながらも、本格的な専門書『学校衛生学』を発行した。前掲杉浦によれば、明治期に出版された学校衛生学書の多くが、「翻訳調で欧米の先人の意見を羅列的に紹介」されていたが、三島の本書は「自ら苦心調査した実態成績を随所に活用駆使し、これを立論の根拠として説を展開」(注16) したという。つまり、実際に当時の学校・幼稚園を巡回しながら、著した内容であった。

三島通良『学校衛生学』の目次を示すと、総論、校地、校舎建築及び教室の構造、採光法、換気法、暖室法、机・腰掛・姿勢・書籍及び塗板、生徒の疾病及び学校医の監督、体操及び遊戯、授業及び休業となっている。学校における環境、衛生などが中心的内容となっていることがわかる。また、序文において以下のように述べている。

「明治24年文部省普通学務局ヨリ、学校衛生事項取調嘱託ノ命ヲ奉ジ、毎年四方ヲ巡回シ諸学校ニ於ケル衛生上ノ現況ヲ視察シ、其生徒ノ健否ヲ検シ、転タ感慨ニ堪ヘザルモノ夥多ナリ。彼ノ校舎ノ設備、校具ノ構造、体育ノ方法等、未ダ一トシテ其本源タル衛生学ノ原則ニ適合セズ」という現状で、「生徒タル者ヲシテ、遂ニ其心身ヲ衰弱萎摩セシメ、将ニ悉ク畸形ト病体トニ陥落セシメントス」(注17) と力説していた。

明治5年「学制」以後、小学校は各地に設立されていったが、現場の実情を克明に視察した三島の痛烈な主張となっていることがわかる。

こうした学校衛生学の中心的内容は、文部省に関与する以前、すでに『ははのつとめ』において、基本方向は示されていたのである。

(2) 学校衛生学の要素と応用

学校衛生学は、単に学校環境や児童の衛生状況についてのみを問題にしていたわけではなく、広範囲な学問領域を含んでいることがわかる。

学校衛生学の学問的位置を解説した三島の口演によれば、学校衛生学には、要素としての学問分野と応用範囲がある。学校衛生学を成り立たせている要素は、生理学をはじめとした8つの学問分野だとしている。そして、学校衛生学の応用分野は、校舎建築他8項目だとし、以下のように解説している。

「生理、衛生、眼科、児科、精神病、心理、地質及び造家ノ八学科ハ即チ学校衛生学ノ要素学ナリ」「而シテ学校衛生学ハ又タ校舎建築、教室構造、採光、換気、生徒ノ疾病、医師ノ監督、体操、遊戯、授業、休業及び温度ノ（温度ではなく「過度」が正しいと思われる・・・筆者）授業ノ八項目ヲ以テ之ガ応用トナス」^{（注18）}

続いて、学校衛生学は教育の基礎であると論じているが、当時の教育にはこの基礎が欠落し、学校児童は衰弱しているという。その原因として、三島は5点をあげている。

「一 父母ノ心身ノ衰弱シタルコト」「二 小児教養法ノ進歩セザルコト」「三 小児心身發育ノ状態ニ係ハラズ漫ニ過度ノ授業ヲ施シタルコト」「四 学校衛生法ノ行ハンザルコト」「五 心身摂生法ノ智育ノ度ニ応セザルコト」^{（注19）} この5点のうち、父母の心身、小児教養法、心身摂生法は、家庭育児にかかわる課題である。学校児童の問題を家庭にさかのぼる視点をもっていることが窺える。

口演における三島の見解を整理すると、「強壯有為ノ国民」をめざすには、「智育、徳育、体育」を柱として、「児童」の「教育」が必要であり、その基礎となる学校衛生が重要になる。教育の基礎としての学校衛生学は、8つの学問分野を要素としてもち、8項目の応用分野が想定されている。そして、学校衛生学とともに、誕生から就学までの「小児教養法」が位置づけられていることに注目したい。「小児教養法」は、小児医学を骨格としている児科学（小児科学）とも連結されている。

(3) 就学年齢論の位置づけ

では、就学年齢論は学校衛生学のどこに位置づけていたのか。前掲三島『学校衛生学』の項目に「就学の年齢」が登場するが、学問上の位置づけについては、明記されていない。三島は、学校教育現場における環境を視察するが、その視点は広範囲に及ぶ。前述した学校衛生学が幅広い要素と応用をもつ所以である。そして、就学の年齢を調査していくなかで、この課題は、更に独自にアプローチすべき課題であることを意識していったのである。就学年齢の問題は、「教育社会における」問題ではあるが、把握の前提となる小児の発育調査自体が必要となる。そして、学校衛生学の全体から位置づけて研究しなければならないというのである。この経過を以下のように述べている。

「学校児童ノ衛生中其就学年齢ノ事ニ至リテハ教育社会ニオケル一問題ナリ然レドモ未ターノ確答ヲ興フルモノナシ如何トナレハ其基礎タル可キ小児ノ発育スルモノヲ調査シタ

ル者ナケレバナリ」「此問題ニ答ヘントセハ第一ニ小児發育ノ度ヲ定メ第二ニ其發育ノ度ガ現在ノ文部省小学令ノ科程ニ適スルヤ否ヲ定メサル可ラス其授業時間並ニ学科ノ配合等ノ問題ノ如キ悉ク之ヲ学校衛生ノ研究ニ於テ判断セザル可カラズ」(注20)

(4) 小児教養法と学校衛生

小児の衛生と学校衛生との関係を整理しておく。三島の主張する小児の衛生とは、妊娠・胎教から就学までの小児教養法と、就学後の学校児童の衛生とを含む内容である。そして、前述したように、児童が衰弱しているのは、就学前の小児教養法が誤っておこなわれているとからだと説くのである。以下、小児の衛生に関する基本的見解を引用する。

「之ヲ大別シテニトナス一ハ妊娠胎教ノ時ヨリ分娩後就学迄ノ間ニ行フモノニシテ之ヲ小児教養法ト名ケ就学シテヨリ後小学校ノ課程ヲ終ル迄ノ間ニ行フモノニシテ之レヲ学校児童ノ衛生法ト称フ」「現今ノ小児ハ既ニ第一期ニ於テ其衛生法ヲ誤マラレ徒ラニ小児ヲ人巧ニヨリテ衰弱ナラシムルノ傾キアリ一例ヲ挙クレバ辛フシテ歩行ヲ始ムルノ期ニ至レハ長袖重靴歩足ヲ妨ケ重量ノ下駄ハ或ハ足ノ發育ヲ妨ケ寒ヲ防キ雨ヲ避ケ車ニ乗り手ニ抱カレ皮膚ノ衰弱ヲ来シ為ニ身体ノ發育ヲ害スル」(注21)

以上のように、就学前の小児教養法の土台を形成することが重要だと主張しているのである。その充実なくして、就学後の学校衛生の構築はありえない。だからこそ、家庭から学校への段差に目を向けようとしていたのだろう。

4. 学校衛生学の知見と子守教育への影響

前述したが、『ははのつとめ』は初版後まもなく増刷されていく。実際にどのような範囲に普及されていたのかは、十分な調査ができていないが、明治20年代の長野県で、子守学校の指導者が『ははのつとめ』を活用している事実がある。

長野県における子守学校は、明治20年代に勃興している。明治23年・24年と凶作と経済恐慌のなかで、農村地帯は貧困家庭のみではなく、一般の女子の就学に深刻な影響が生まれていた。この時期、長野県内の農村地域には、子守学校・子守教育所が続々と生まれ、『雑誌信濃教育』(注22)に実践例が掲載されている。

子守教育の目的は2点あるとされ、「子守女子に普通教育を授くること」「嬰兒保育方法の改良」などが記述されている。つまり、学校へ乳幼児を背負って来るのであり、その女子への普通教育と、背負われている乳幼児の保育に、ともに心を砕くのである。

当時の教育者の苦勞を察することは容易ではないが、子守教育の中心的役割を担っていた中村多重の論文(注23)に『ははのつとめ』が登場している。中村は、乳児が泣いている場合に、担任教師が処置すべき方法を、以下のようにまとめている。

「嬰兒若し苦痛を感じずる時は目を開き涙をたくさん出して泣くこの場合においては、早く子守の背より抱き下ろし体を改め痛み場所を調べて(後略)」「嬰兒眠りを催す時は目を

細むるか或いは目のなかに少しウルミを生じて泣く（後略）」「一定の場所に長くおりたる為に嬰兒退屈を為したるときは目を開き涙を多分に出す（後略）」「嬰兒飢感ずるときは目を開き（後略）」（注24）

中村がこれを具体化するにあたって、三島の『ははのつとめ』を参考にしたと、次のように述べている。

「予が数年前母のつとめと題せる三島医学士の著書に嬰兒の啼泣は其の言語にして愛らしき彼は之に依って種々の要求を發表するものなり故に母たらんものは能々注意して其の意味を学ばざるべからず」（注25）

引用部分は、本稿2(2)②「哺乳即教育の端緒」と同一の内容である。文言上の相違は、中村が要旨を述べているためと思われるが、『ははのつとめ』の内容であることは明瞭である。

このように、子守教育という特殊性のある実践ではあるが、『ははのつとめ』は、長野県教育現場において活用されていたのである。

5. 三島の家庭育児観の背景

(1) 明治初期の幼児教育・育児思想の展開

次に、明治初期の幼児教育・育児思想について概観する。本稿は、以下で述べる思想家たちの特徴を検討することが主題ではない。『ははのつとめ』を執筆した明治20年前後における三島の家庭育児観は、これらの思想や立場とどう関連したかを問うことである。

幕末・明治維新から明治10年代末までにおいて、さまざまな幼児教育思想、家族制度論、育児論などが展開されている。たとえば、明治初期の啓蒙思想家・中村正直や福沢諭吉（注26）をあげることができる。また、自由民権家・植木枝盛（注27）も家庭における乳幼児の養育について論を展開している。こうした思想家たちの見解については、すでに前掲諏訪義英、山住正巳・中江和恵、神島二郎、木下比呂美他が検討している。山住によれば、父母が責任をもって子育てをする役目を担うのは、今では常識だが、「それが明確な主張としてあらわれるのは、明治初期、啓蒙思想家たちの子育て論以降である」（注28）と指摘している。江戸から明治期に入り大きく転換していく家制度は、明治31年の民法による夫婦間の一夫一婦制など、近代化がすすむ面をもった。しかし、夫婦間の不平等や親子関係などは、封建時代の家族関係がそのまま残されていく。そして、明治憲法・教育勅語による家族道德と天皇を頂点とする家族国家体制が確立されていくのである。

では、明治維新以降、20年頃までの家族論や子育て論はどうであったのか。前掲諏訪は「教育面では、明治10年頃まではむしろ西欧思想、とくに啓蒙思想の影響を多分にうけていたし、これら啓蒙思想家や自由民権論者によって家族論、家族思想の領域では江戸時代とは異なった家庭・家族論、そして家庭教育論が唱えられていた」（注29）と分析している。

前掲山住らの知見によれば、東京女子師範学校附属幼稚園設立時の師範学校校長・中村正直は、教育の場として家庭以外(幼稚園)の必要性を認める立場ではあるが、幼児教育は、本来的に家庭で賢い母親が行うべきだという見解をもっていた。中村「善良ナル母ヲ造ル説」などにおいて、女子教育の振興が提言されていた。また、福沢諭吉は江戸時代の家制度を解放し、親子や夫婦の対等や一身独立・一国独立を主張し、家庭教育を重視している。自由民権論者・植木枝盛の場合は、権利主体として子どもをとらえていた。家庭教育において、幼児の活動には大人の干渉を排除する必要性なども力説していた。こうした時期の思想を分析する前掲木下「近代的孩子像と国家主義的孩子像」は、明治10年代後半から20年頃について、以下のように指摘する。「自由民権運動の挫折と天皇制国家の確立は、政治や国家などの『公』に関する議論に終止符を打ち(中略)家族・家庭・結婚・子どもの養育といった『私』的ことがらに」関心が移っていく。そして、「明治憲法・教育勅語の発布により後者に関しても国家的結論が示されることになるのであるが、しかし明治20年前後の数年間は、少なくともこの分野に関してはなお、旧保守的思想と近代的思想の激しい論戦が繰り広げられる余地」があったという。そして明治20年代に入ると、さまざまな子どもへの関心が高まるとも指摘している(注30)。

いっぽう、周知のように、明治9年、東京女子師範学校附属幼稚園が創立される。同時期、幼児教育に直接かかわっていた立場からは、幼児教育思想の面よりも、新しく幼稚園教育を推進するために必要な保育の内容・方法が中心として紹介されていく。明治初期から20年頃までの幼稚園に関する諸事情は、前掲日本保育学会『日本幼児保育史第1巻・第2巻』をはじめ、多くの論考で詳しく検討されてきたことである。官立の附属幼稚園が、フレーベル理論の影響を多く受けていたことや日常の保育をすすめる方法論が求められていた以上、恩物の紹介など、保育方法が普及された面があったことなどが指摘されている。

このように、明治維新以降、明治10年代末頃までをみても、幼児教育思想、家族制度論、育児論などについて、多方面からさまざまな識者が論を展開していることがわかる。

(2) 三島の立場と家庭育児観

では、同時期に展開されていた三島の家庭育児観は、どうみることができるのか。三島が明治初期の啓蒙思想家や自由民権論者の思想的影響を受けたか否かは、現段階では判断できない。三島の生涯をくわしく検討している前掲杉浦などにおいても、この時期における三島の家庭育児観や幼児教育思想まではふれていない。

しかし、以下の点は言えるのではないか。三島の文部省学校衛生行政における活躍をみるかぎり、明治政府の側での生き方をしていた。その立場において、医学者としての育児論を展開したということである。また、三島が幼稚園教育の現場と本格的な接点をもつのは、明治24年以降、身体発育調査などで各地を訪問するようになってからである。それ以前(明治10年代～20年前後)において、身近に幼稚園があった可能性も否定はできないが、幼児教育思想などに関するくわしい見解はみられない。2でふれてきたように、家庭育児

の側から幼稚園や学校環境のあり方を論じていたのである。

三島の出自でわかっているのは、武州入間郡（現在の埼玉県）出身で、家系が修験道であったということぐらいである（注31）。三島は、明治11年以降、外国語学校に学び帝国大学医学部、さらに同大学院へ進学した。学生時代に父親を失っており、苦学の末、学士（後に博士）を取得（注32）する。

以上の諸事情から、筆者は、三島の家庭育児観を次のように位置づけたい。三島は、明治20年代半ば以降、明治政府・文部省行政の立場として富国強兵にかなう思想を展開していくようになる。こうした背景・制約をもちながらも、純粹に身体発育の専門家・医学者として家庭育児観を主張していた。『ははのつとめ』にみる三島の家庭育児観は、家庭における乳幼児や児童の現状を見つめ、母親の職務を啓蒙する姿勢を明確にもっていたことを示している。遊戯を基本とし「注意して放任する」という三島の家庭育児観の由来については、引き続き解明すべき課題があると考えている。

結び 一家庭育児観を土台とした就学年齢論一

第一の仮説検証として、『ははのつとめ』には、その後確立をみる学校衛生学の知見が、すでに含まれていたことがわかる。三島は、文部省学校衛生行政に関与する以前から、劣悪な学校・幼稚園などの環境・設備の問題点に関心をもっていたのである。また、『ははのつとめ』が子守教育の実践において、活用されていた事実にも注目できる。では、三島の主張した「注意して放任する」子育て法は、いかなる育児思想から由来しているのか。明治期以前の日本の伝統的育児観か、あるいはドイツや欧米諸国から吸収したのか、さらに追究していきたい。

二つ目には、三島の就学年齢論は、学校衛生学と家庭育児観により構成されていることがわかる。就学という課題を、遊戯を中心とする家庭育児観からみるからこそ、三島は、家庭から学校への段差に注目できたといえるだろう。つまり、家庭で自由奔放に遊戯を中心とした生活をしていた幼児たちが、学校への就学による変化（段差）にさらされてしまう。こうした幼児・児童の状態を三島が認識しようとしていたからこそ、学校環境を問題視できたとも考えられる。最後に『就学年齢問題』の結論部分を引用しておく。

「彼ノ家庭ニ於テハ自由ニ任セテ奔走遊戯シタル児童ガ、一定時間静座シテ学習ニ従事スルコト、既ニ健康ノ障害ナルニ、加エテ現今ノ言語、文字等ノ難シキヲ教フル所謂泣面ニ蜂ノ諺ヲ想起セザルヲ得ズ」「就学年齢問題ニ関シテ最モ注意スベキ事ハ先ニ論ジタル数事項ノ外、小学校ノ第一学年ニ於ケル学習ノ難易ト云エル事之ナリ。同ジク満六年ノ児童ヲ就学セシムルトシテ、其言語、文字、文章ノ容易ナル欧米諸国ト、之ト正反対ナル本邦トノ間ニハ、幼年ナル児童ノ学習ニ殊ノ外難易ノ別アルベシトノ問題ハ、必ズ研究ヲ要スル事ナリ」「即チ第一学年ニ於ル教授時数ヲ減ジ、休憩時数ヲ増スノ道アルノミ、況ヤ

一週十八時ノ教授時数及午後ノ教授廃止ハ、欧州ニ於テモ同学年ニ対スルモノトシテ、有数ノ学校衛生学者ノ称揚セルモノナルニ於テオヤ」(注33)

三島は、『ははのつとめ』の家庭育児観を土台にして就学課題をみつめ、小学校第一学年への具体的配慮を主張したのである。

(謝辞) 本研究にあたり、聖徳大学大学院小川博久教授より懇切丁寧なご指導を受けたことを感謝する。

(注)

- (1) 三島通良は、明治20年代に活躍した学校衛生学者・小児科医である。『ははのつとめ』は、三島による近代医学の立場からの育児書で国会図書館所蔵。
- (2) 近藤幹生「三島通良『学制調査資料・就学年齢問題』(明治35年)に関する一考察」、日本保育学会『保育学研究』第43巻第1号、2005年。三島著『就学年齢問題』は、国会図書館所蔵。
- (3) 先行研究及び参考文献として用いた資料を示す。

珠玖捨男『日本小児科医史』久山社、1997年。杉浦守邦「三島通良 (1)－(18)」、『学校保健研究』第10巻2号～12巻12号、1968-1970年。ZhenSongAn「養生思想と教育的学校保健の成立」、一橋大学社会学研究科博士論文、2001年。三島『学校衛生学』1893年、国会図書館所蔵。近藤真庸「学校衛生顧問会議の研究 (1)～(4)」、中京女子大学紀要1986-1988年。『国家医学会雑誌』73号、76号、108号、111号、162号、163号、東北大学、九州大学で所蔵。佐藤秀夫「学校制度と年齢一年齢主義の歴史的背景」『発達』VOL1, NO3, ミネルヴァ書房、1980年に所収。水本徳明「明治期長野県における就学年齢の統制に関する研究」、筑波大学教育学系論集19/1、1994年。三原芳一「明治の就学年齢」、『花園大学研究紀要』第24号、1992年。神津善三郎『近代日本における義務教育の就学に関する研究』、銀河書房、1978年。信濃教育会編『雑誌信濃教育』、図書刊行会、1982年。トク・ベルツ編・菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』(上)(下)、岩波文庫、1979年。山住正巳「近世における子ども観と子育て」、神島二郎「天皇制国家における子ども観」、太田素子「近代的孩子観の胎動」、木下比呂美「近代国家と一身独立」、木下「近代的孩子像と国家主義的孩子像」は、いずれも『保育幼児教育体系第5巻』旬報社、1987年。諏訪義英「明治時代の幼児教育思想」、『日本の幼児教育思想と倉橋惣三』所収、新読書社、1992年。立川昭二『病気の社会史』、岩波書店、2007年。山住正巳・中江和恵『子育ての書1・2・3』、平凡社、1976年。日本保育学会『日本幼児保育史第1巻・第2巻』、フレーベル館、1968年。文部省『幼稚園教育百年史』、ひかりのくに、1979年。岡田正章『日本の保育制度』、フレーベル館、1970年。湯川嘉津美

『日本幼稚園成立史の研究』, 風間書房, 2001年。

- (4) 『ははのつとめ』は, 第1冊を「親の巻」第2冊を「子の巻」としている。いずれも国会図書館所蔵。原文はカタカナ, ひらがなが混在しているが, 引用は原文のままとした。なお, わかりにくい箇所のみ, 括弧書き(・・筆者)で必要最小限の文言を補った。
- (5) 『ははのつとめ』「子の巻」第二版(明治23年)の序。
- (6) 前掲山住正巳・中江和恵『子育ての書3』所収, 287-366頁。
- (7) 『ははのつとめ』「親の巻」序。
- (8) 『ははのつとめ』「子の巻」1-3頁。
- (9) 『ははのつとめ』「子の巻」6-8頁。
- (10) 『ははのつとめ』「子の巻」57-59頁。
- (11) 『ははのつとめ』「子の巻」56-57頁。
- (12) 『ははのつとめ』「子の巻」53頁。
- (13) 『ははのつとめ』「子の巻」65-66頁。
- (14) 『ははのつとめ』「子の巻」65-66頁。
- (15) 前掲三島『学校衛生学』序。
- (16) 前掲杉浦, 三島通良(9) 527頁。
- (17) 前掲三島『学校衛生学』序。
- (18) (19) 『国家医学会雑誌』73号, 27頁。
- (20) 『国家医学会雑誌』76号, 10頁。
- (21) 『国家医学会雑誌』76号, 10～11頁。
- (22) 『雑誌信濃教育』は, 信濃教育会編で1886(明治19)年創刊された。復刻版は図書刊行会, 1982年。
- (23) 前掲神津によると, 中村多重は子守教育に長い経験をもつ。95～114頁。
- (24) 『信濃教育』明治26年号, 18-21頁。
- (25) 『信濃教育』明治26年号, 21頁。
- (26) 中村正直及び福沢諭吉については, 前掲木下36-39頁。
- (27) 自由民権家・植木枝盛については, 前掲木下43頁。
- (28) 前掲山住・中江『子育ての書3』42-43頁。
- (29) 前掲諏訪65頁。
- (30) 前掲木下比呂美42頁。
- (31) (32) 細谷俊夫他編『新教育学大辞典』第6巻, 第一法規, 1990年, 322頁。
- (33) 前掲三島『就学年齢問題』86-89頁。

こんどう みきお(保育学)